

嘉永七年のアイヌ語 ― 特に『蝦夷紀行』について

成 田 修 一

1. 歴史的背景

嘉永六年（一八五三）、アメリカのペリーが率いる艦隊が浦賀に来航し、日本に国交・通商の開始を求めた。その一ヶ月後の七月一八日に、ロシアの遣日全権使節プチャーチン提督が率いる艦隊が長崎に来航、日本の開国を要求した。プチャーチンからの要求には、開国の他に樺太の分界についての提案もなされた。しかし幕府はこの当時、樺太の支配は全く念頭になく、松前藩に支配を委ねていた状態であった。

プチャーチン来航の一ヵ月半後に、ロシア船が松前藩の樺太南部における主要漁場であり、また行政の中心地でもあった久春古丹（クシュンコタン。旧大泊、現在のコルサコフ）に到来、上陸したロシア兵が占拠し、要塞を構築した。⁽¹⁾ この知らせを受けた幕府は、蝦夷地調査が急務であることを痛感し、急ぎ幕吏を派遣することに決し、幕府目付堀利熙（織部）、勘定吟味役村垣範正（与三郎）を首班とする蝦夷地調査および樺太国境見分への調査隊が派遣された。この調査隊は大規模なものであり、当時の北海道及び樺太、千島（国後・択捉）まで調査の対象となった。その結果、いろいろな記録が残っている。⁽²⁾

2. 底本について

本稿で取りあげる資料『蝦夷紀行』⁽³⁾は、縦一三・九センチ、横二〇センチの横長の一冊本で、村垣範正の従者として参加した尾張屋の番頭忠蔵という者が書き残した記録書（道中日記）である。表題は「蝦夷紀行 全」、内題は「嘉永七甲寅年三月廿七日御発駕 従東都奥州通三馬屋迄 従松前蝦夷 唐太嶋中韃靼迄 箱館迄御休泊日記帳」とある。本文は、日本橋を出発し、宇都宮・仙台・盛岡・青森を経て、北海道松前にわたり、北海道西海岸を北上し、宗谷から樺太に至り、クシユンコタン他を見分、再び北海道にわたり、今度は東海岸を南下し箱館に帰着、青森佐井までを記録する。各地の名所・里程・戸数等を詳細に記した日記である。巻末にアイヌ語が一一三語収録されている。⁽⁴⁾

本稿では、このアイヌ語について考察を行うものである。江戸時代には他にアイヌ語を記録する資料が残され、その資料毎にそこから導きだされる表記の概観が報告されている。⁽⁵⁾なお、この『蝦夷紀行』には、アイヌ語の他に、オロッコ語の「数」⁽⁶⁾の記録がある。

3. アイヌ語表記について

アイヌ語は北海道方言・樺太方言・千島方言に大別される。江戸時代に記録されたアイヌ語資料は、現在までの各資料毎に報告された研究成果からほぼ北海道が主な記録地とされる。したがって、ここに北海道アイヌ語について、音韻の部分を『アイヌ語方言辞典』⁽⁷⁾の簡略音素表記によって示すと、

母音／a、i、u、e、o／

子音／p、t、k、c、s、r、m、n、w、y、h、，／

である。また、音節構造は、

(イ) 子音+母音型(開音節)

(ロ) 子音+母音+子音型(閉音節)

の二種類である。

なお、以下の考察では、『アイヌ語方言辞典』の日本語見出し語、アイヌ語、『蝦夷紀行』のアイヌ語、日本語の見出し語の順に記載し、アクセント記号、喉音音素／、／は特に必要でない限り省略した。

4. 表記について

(1) a、i、u、e、o

『蝦夷紀行』(以下、『紀行』)では、a、i、uは各々ア、イ、ウの表記がされ、oは江戸時代のアイヌ語資料全般に見られるようにオをヲと表記されている。eも同様にエの表記がなされ、『紀行』でもeはエと表記されているが、イの表記も見られ、eに関しては二通りの表記がされている。

火	ape	アベ	〔火〕
六つ	iwanpe	イワンベ	〔六ツ〕
笹	uras	ウラン	〔笹〕 (ウラシの誤写)
砂	ota	ヲタ	〔砂〕
知らない	eramuskare	エラムシカレイ	〔しらぬ事〕
鼻	etu	イト	〔鼻〕

u はやや奥で調音されるために、オに聞こえることがある。

七つ	aruwanpe	アロワンベ	〔七ツ〕
人間、ひと	ainu	アイノ	〔人物〕
帯	kut	コチ	〔帯〕
神	kamuy	カモイ	〔神〕

(2) p, t, k

アイヌ語には無声・有声の対立がなく、破裂音 p, t, k もまた、それぞれパゝバ行、タゝダ行、カゝガ行で表記される。『紀行』では次のように表記されている。

消し炭	pas	パシ	〔炭〕
頭	sapa	シヤバ	〔頭〕
美しい	pirka	ピリツカ	〔寄麗 <small>（マモ）</small> 〕
川	pet	ベツ	〔川〕
これ	tanpe	タンベ	〔是〕
大きい	poro	ポロ	〔大きいもの〕

なお、pi, pu については、h 音に置き換えられて表記される例が見られる。

みんな	opitta	ヲヒツタ	〔皆々〕
額	kiputur	キフトロ	〔ひたい〕

pe にビの表記例が見られた。

箸	ipepasuy	イビバシ	〔箸〕
---	----------	------	-----

また、音節末の p はブ、ベ、ツピ、ツプと表記されている。

まつげ sikrap シキラブ 「まつ毛」

六つ iwarp イワンベ 「六ツ」

竹 top トツピ 「竹」

一つ sinep シ子ツプ 「壺ツ」

一般に音節末の p、t、k は破裂がないため、聞き取りにくい。そのため表記にゆれを生じ、母音を加える、破裂音として、促音として表記したりする。

竹 top トツプ 「竹」

暑い sesek セゝツクシウ 「あつし」

ta はタ、to はトと表記されている。

ほほ notakam ノタカム 「ほう」

犬 seta セタ 「犬」

竹 top トツプ 「竹」

tu は日本語には普通ない音であるので、江戸時代の表記を考える際にも、特に問題とされる音であり、カナ表記の際にくつかの表記がされる。この音をツ(cu)やト(to)と区別して表記してある時は、アイヌ語についてよく知っている人が記録したものと考えられ、アイヌ語資料としての価値が高い⁽⁸⁾。但し、現在までのところ、そのような資料は限定され、一般的にはツヤトと表記されている資料が大部分である。

『紀行』でも同様に、トと表記されている。

鼻 etu イト [鼻]

早い tunas トナセ [はやく]

海 atuy アトイ [海]

但し、tuにツと表記されている場合がある。

あつし atus アツチ [アイの着物]

音節末のtは、チ、ツと表記されている。

帯 kut コチ [帯]

川 pet ベツ [川]

kaはカ、kiはキ、koはコ、kuはクまたはコと表記されている。

神 kamuy カモイ [神]

小刀 makiri マキリ [小刀]

眠る mokor モコロ [寝る]

木 cikuni チクニ [木]

帯 kut コチ [帯]

音節末のkには、キまたはツ、ツクの表記が見られる。

暑い sesek セ、ツクシウ [あつし]

眼 sik シキ [目]

歯 nimak ニマキ [は]

妹	matak	マタキ	〔妹〕
湯	sesecka	セヽツカ	〔湯〕

破裂音 t, k は無声（清音）に表記される傾向である。

(3)
c

ca はチャ、ci はチと表記されている。

おじいさん	caca	チャク	〔年寄〕
嫌う	kocan	コチャン	〔いや〕
木	cikuni	チクニ	〔木〕

(4)
s

sa はサまたはシヤ、si はシ、su はシ、se はセと表記されている。

頭	sapa	シヤバ	〔頭〕
姉	sa	サア	〔姉〕
一つ	sinep	シ子ツプ	〔壺ツ〕
茶碗	suma itanki	シマユタン	〔瀬戸物〕
湯	sesecka	セヽツカ	〔湯〕

音節末の s には、シ・セ・チの表記が見られる。

くちびる	papus	バプシ	〔唇〕
消し炭	pas	パシ	〔炭〕
早い	tunas	トナセ	〔はやく〕

(5)
r

あつし attus アツチ 「アイの着物」

ra、ru、re、roはラ、ル、レ、ロと表記、riはリまたはルの表記がされている。

まゆ rar ラル 「まゆ毛」

小刀 makiri マキリ 「小刀」

山 nupuri ノブル 「山」

太い ruye ルユ 「太い」

七つ arwanpe アロワンベ 「七ツ」

三つ rep レツプ 「三ツ」

大きい poro ポロ 「大きいもの」

音節末の r は、直前の母音によってラ、リ、ル、レ、ロと表記されることが多いが、『紀行』ではリ、ル、ロのいずれかで表記されている。

まさかり mukar モツカリ 「まさかり」

額 kiputur キフトロ 「ひたい」

眠る mokor モコロ 「寝る」

□ par バロ 「□」

まゆ rar ラル 「まゆ毛」

(6)
m、n

maはマ、muはモ、moはモと表記され、音節末の m はマまたはムと表記されている。

小刀	makiri	マキリ	〔小刀〕
神	kamuy	カモイ	〔神〕
眠る	mokor	モコロ	〔寝る〕
ない	isam	イシヤマ	〔ない〕
ほほ	notakam	ノタカム	〔ほう〕

na はナ、ni はニ、nu はノ、ne は「子」という仮名、no はノと表記され、音節末はンと表記されている。

谷川(沢)	nay	ナイ	〔沢〕
齒	nimak	ニマキ	〔は〕
山	nupuri	ノブル	〔山〕
人間・ひと	aynu	アイノ	〔人物〕
一つ	sinep	シ子ツプ	〔壺ツ〕
ほほ	notakam	ノタカム	〔ほう〕
長い	tanne	タン子	〔長イ〕

(7) w、y

wa はワ、we はウエと表記されている。音節末の表記例はない。

水	wakka	ワツカ	〔水〕
七つ	arwanpe	アロワンベ	〔七ツ〕
臭い	hura wen	フラウエン	〔くさし〕

ya、yu、yo に該当する表記例はなく、ye にユの表記がされている。

太い ruyē ルユ 「太イ」

音節末の y はイと表記されている。

海 atuy アトイ 「海」

神 kamuy カモイ 「神」

(8)
h

hu にフ、ho にホが表記されている。

臭い hura wen フラウエン 「くさし」

さきに hoski ホシキ 「先」

以上の各表記を整理すると、次のような表になる。

a	i	u	e	o		ma	mi	mu	me	mo	-m
ア	イ	ウ	エ・イ	ヲ		マ	ミ	モ	メ	ム	マ・ム
ka	ki	ku	ke	ko	-k キ・ツ・ツク	ya		yu	ye	yo	-y イ
カ	キ	ク・コ	ケ	コ		ヤ		ユ	ユ	ヨ	
sa	si	su	se	so	-s シ・セ・チ	ra	ri	ru	re	ro	-r リ・ル・ロ
サ・シヤ	シ	シ	セ	ソ		ラ	リ・ル	ル	レ	ロ	
ta		tu	te	to	-t チ・ツ	wa	wi		we	wo	
タ		ト・ヅ	テ	ト		ワ	ウィ		ウエ	ウオ	
na	ni	nu	ne	no	-n ン	pa	pi	pu	pe	po	-p プ・ペ・ ツピ・ツプ
ナ	ニ	ノ	ネ	ノ		パ・バ	ピ・ビ	プ	ペ・ビ	ポ	
ha	hi	hu	he	ho		ca	ci	cu	ce	co	
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ		チャ	チ	ク	セ	コ	

5. アクセント

アクセント核の音節では、母音を加えて表記している場合があり、開音節の一音節語は比較的長めに発音される傾向がある。

姉	ss、	サア	〔姉〕
鍋	ss、	シウ	〔鍋〕
湖・沼・池	ss、	トウ	〔堤〕

6. 方言

収録されているアイヌ語を現代諸方言と比較したとき、その語形が一致したものは、一一三語の内、次の通りである。

八雲	七二	(六三・七%)
幌別	七四	(六五・五%)
沙流	六九	(六一・一%)
帯広	六三	(五五・八%)
美幌	六八	(六〇・二%)
旭川	六七	(五九・三%)
名寄	六九	(六一・一%)
宗谷	六三	(五五・八%)

樺太 三四 (三〇・一%)

その中であって比較的方言色の濃いいくつかの語を拾いだしてみると、次の通りである。⁽⁹⁾

十	to	トウ	[十]	《沙流》
くちびる	papus	バブシ	[唇]	《八雲・幌別・名寄》
木	cikuni	チクニ	[木]	《八雲・幌別・沙流》
口	par	バロ	[口]	《八雲・幌別・沙流・旭川》
頭	sapa	シヤバ	[頭]	《八雲・幌別・沙流・旭川・名寄・宗谷・樺太》
姉	sa	サア	[姉]	《八雲・幌別・沙流・名寄》
お膳	ita	イタ	[膳]	《帯広・美幌・旭川・名寄》

また、本資料には、日本語の同じ見出し語について、別々にアイヌ語を記録している例が、二例見られる。

① いやと言

コチャン

いやだと言

トラ子

いやと言

コチャン

② 二人して寝る

ウトロケアン子

二人りして寝ると言

トラセノモクロ

方言的差異を示しているかは不明である。「コチャン、トラ子」については、『アイヌ語方言辞典』と比較すると、「きら(嫌)う」の項に

kocan

帯広・宗谷

etoranne

八雲・沙流・帯広・美幌・旭川・名寄

という語形を見いだすことができる。

7. 収録語彙について

本資料に記録された語彙を当時の資料、江戸時代に公刊された、『もしほ草』（文化元年序、寛政四年跋。『藻汐草』『蝦夷方言藻汐草』とも）⁽¹⁰⁾、及び北海道の名付け親として、また北方に関する膨大な資料を残した松浦武四郎の『蝦夷語』（嘉永三年成立。稿本）⁽¹¹⁾と比較すると、

『もしほ草』と語形が一致するものは七五語（六六・四％）

『蝦夷語』と一致するものは六三語（五五・八％）

となる。

この結果、当時、個々の資料に記録されている語の共通性、及び資料毎に異なる語の考察が今後必要とされる。

8. その他

例は極めて少ないが、人称接辞（人称代名詞）や単数・複数を記録している。

i-ku イク 「吞事」

eani ヤニ 「貴様」

ciokay , cokay モウカイ（チウカイの誤写） 「我と言」

9. まとめ

以上、『蝦夷紀行』におけるアイヌ語の仮名表記のしかたのおおよそである。限られた語数の中での考察であり、また、どのような基準でアイヌ語を記録したか明らかではないが、当時の人が、どのように日本語と異なる言語を記録（表記）したかの一端をみてきた。

江戸時代のアイヌ語の仮名表記は問題（例えば、そのまま読んでもアイヌ語にならないことが多い、開音節と閉音節の区別をしていない、等）もあるが、現代の辞書等を参考にして、この記録された語の仮名表記の方法を分析し、その結果に基づいて、語形を読み返していくと、多くの語について、当時使われていた語形を推定でき、アイヌ語のより古い形、変化をみることができる。

本稿で考察しきれなかった問題、例えば、著者、当時の他資料との関連、未解明の語句の検討等については、今後の研究課題としたい。

注

- (1) 秋月俊幸「嘉永年間ロシアの久春古丹占拠」『スラブ研究』 第一九号 一九七四年 北海道大学スラブ研究センター。
秋月俊幸「幕末の樺太における日露雑居の成立過程（二）」『北方文化研究』 第一二号 一九七七年 北海道大学。
ニコライ・ヴッセ著 秋月俊幸訳『サハリン島占領日記 一八五三―一八五四 ロシア人の見た日本人とアイヌ』東洋文庫七二五 二〇〇三年 平凡社。
- (2) 『村垣淡路守公務日記』 大日本古文書 幕末外国関係文書付録二、七所収。
『蝦夷日記』 北海道大学附属図書館北方資料室蔵。
『天辺飛鴻』 嶋田熊次郎 万延元年写 市立函館図書館蔵。
『唐太島記行』（書題竝。なお、人の巻最終丁に「蝦夷唐太日記」とある） 三康図書館蔵。

『南北蝦夷地魯西亞国 話通言』 依田次郎助 嘉永七年 北海道立図書館蔵。

『蝦夷地旅行記録』 依田治郎祐 北海道大学附属図書館北方資料室蔵。

『唐太日記』 鈴木重尚 嘉永七年 国立公文書館内閣文庫蔵。

『唐太嶋日記』 依田治郎祐 嘉永七年 北海道大学附属図書館北方資料室蔵。

『蝦夷目撃』 嘉永七年 国立公文書館内閣文庫蔵。

『東西蝦夷地日記』 久住九兵衛 北海道大学附属図書館北方資料室蔵。

『蝦夷地紀行』 安政二年写 東京大学附属図書館南癸文庫蔵。

『蝦夷日記』 国立歴史民俗博物館蔵。

(3) 本書は、安政六(一八五九)年筆写の一冊本で、一九八七年、影印及び成田修一解説で沙羅書房から刊行。

(4) 嘉永七年の調査隊の記録書中、アイヌ語が記録されているのは、次の資料である。

『唐太島記行』

『南北蝦夷地魯西亞国 話通言』

『蝦夷地旅行記録』

『唐太日記』

(5) 田中聖子・佐々木利和「近世アイヌ語資料について」とくに『もしほ草』をめぐる『松前藩と松前』二四 一九八五年 松前町史編集室。

田中聖子「『蝦夷言葉』の「義経浄瑠璃」について―近世のアイヌ口承文芸の記録に関する一考察―」『早稲田大学語学教育研究所紀要』三八 一九八九年

早稲田大学語学教育研究所。

田中聖子「アイヌ語の仮名表記の変遷」『大野晋先生古稀記念論文集 日本研究―言語と伝承』一九九〇年 角川書店。

佐藤知己「『蝦夷言いろは引』の研究 解説と索引」『北大言語学研究室報告』第八号 一九九五年 北海道大学文学部言語学研究室。

拙稿「江戸時代のアイヌ語」『言語』一四卷二号 一九八五年 大修館書店。

拙稿「江戸時代の蝦夷語集概観および『蝦夷語集』の表記について」『二松学舎大学人文論叢』第三八輯 一九八八年 二松学舎大学人文学会。

拙稿「松浦武四郎のアイヌ語資料―『後方羊蹄路志』について」『松浦武四郎研究会会誌 没後一〇〇年記念特輯』第八・九合併号 一九八八年

松浦武四郎研究会。

(6) このオロッコ語について、次のような報告がある。

「旅行家で、樺太南部までも踏破した松浦竹四郎(武四郎)の旅行記録は今日貴重なものであるが、安政三年(一八五六)樺太のホロナイ川河口まで行った記事は、かれの著書『北蝦夷地誌』(安政七年―一八六〇―刊)や『按北扈從 松浦竹四郎日誌』(国立史料館保管および北海道大学附属図書館北方資料室蔵)に載り、後者の巻の十七に「ニクフン語身材の部」、巻の十八に「オロッコ語身材の部」があり、(略)さらに『カラフト西奥地里数書』(北海道立文書館所蔵写本)のなかのかれの自筆とされる「オロッコ語」の条には、ウイльта語・ニクフン語・サンタン語の三六九項目の単語・短文が載っている。(略)嘉永七年(一八五四)幕府の蝦夷地見分に村垣範正の従者として加わった尾張屋の番頭忠蔵の記した『蝦夷紀行』(安政六年―一八五九―筆写)の巻末には「オロッコ人数取」としてウイльта語の1から10までの数詞が「イタ トウ イラア セイトンタ ノゴ ナタ チャツボ ホヨ デヨア」と記されている。これらの記録は十九世紀半ばのものであり、ウイльта語について言えば、この言語のもっとも古い記録だろう。」(「特別展 石田収蔵―謎の人類学者の生涯と板橋―」図録 平成二二年 板橋区立郷土資料館所収、池上二良「二十世紀初期石田収蔵氏採録のウイльта語資料について」)。

(7) 本稿では、『アイヌ語方言辞典』 服部四郎編 一九八一年(第二刷)刊 岩波書店 を使用した。

- (8) 最上徳内「蝦夷草紙」(寛政二年、東京大学図書館蔵、自筆稿本)では、tuを「ツ」または「ト」を用いて表している。上原熊治郎「藻汐草」(寛政四年)では「ッ」と表記している。
- (9) 中川裕「言語地理学によるアイヌ語の史的研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 第二号 一九九六年 北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- (10) 本稿では、『藻汐草』 一九七二年 国書刊行会 を使用した。本書は、東京国立博物館所蔵本を影印したものである。なお、『藻汐草』については、田中・佐々木前掲書(5) 参照。
- 拙編『近世の蝦夷語彙 《もしほ草》篇』 一九七七年 私家版。本書は、『藻汐草』のアイヌ語をアイウエオ順に配列した索引である。
- (11) 本稿では、国立国文学研究資料館史料館寄託 松浦家文書 を使用した。
- 拙編『近世の蝦夷語彙Ⅳ 《蝦夷語》篇』 一九八六年 私家版。本書は、『蝦夷語』を翻刻し、収録されているアイヌ語をアイウエオ順に配列した索引とからなっている。